第８章　祈りについてのキリストの教え③

答えを求める信仰を増し加える

イエスは、祈りについて語られる際、しばしば信仰について語ってもおられます。聞かれる祈りとは、例外なく、信仰がその核心にあるのです。祈りとは信仰の言葉です。ですから、信仰は聞かれる祈りにとっての前提条件です。

「神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならないのです」（ヘブル 11:6）。

信仰の無い祈りほど不毛なものはありません。逆に言えば、クリスチャンの行いの中でも、信仰を持って祈るということこそ、何より生産的で意味のあることなのです。

イエスは答えて言われた。「神を信じなさい。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、「動いて、海に入れ」と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります。だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります」（マルコ 11:22-24）

信仰は、神の御手を動かす原動力です。しかし、山を動かすほどの信仰をいかに行使するかについては、実に容易に誤解がなされます。中には、言葉にさえすれば自動的にそうなっていく、すなわち、祈っている事柄を告白すれば信仰は高まると教える人がいます。「自分の言ったとおりになる」（11:23）というわけです。しかし、信仰を抱き、行使するには、単に言葉で言うよりもはるかに多くのことが関わってきます。「言う」ということは、必ずしも信じていることではありません。というのも、言葉は、純粋に人間的な欲望の現れとして人の霊から溢れ出ることもあるからです。「言う」ということは常に、祈りから生じてくる副産物でなければなりません。「言う」ことを祈ることから切り離すのは、車をエンジン無しで走らせるようなものです。そればかりではありませ

ん。「言う」ということは、神から示されたみこころに一致するものでなければならないのです。

> **何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。（Ｉヨハネ 5:14-15）**

マルコの福音書 11 章 22-24 節には、信仰についての三つの教えが含まれています。第一は**「神を信じなさい」**というイエスの奨励です。これはほとんど命令のようにも聞こえますが、「信じなさい」という部分は、命令形ではなく、単純な現在形で語られています。この箇所は、古い写本には「もしも神を信じるなら」と書かれていることもあります。確かに、クリスチャンは時として、神を信じようと躍起になっている自分に気づくことがあります。信仰について証しをし、自分の信仰を声高に語り、様々な人間的な方法を用いながらも、信仰をいただくための単純な聖書的方法については、往々にして見過ごしがちなのです。すなわち、神のみことばそのものです。**「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです」（ローマ 10:17）。**信仰にとっての一番の刺激は、聖霊によって生きたものとされた神のみことばなのです。

イエスが単純に「信じなさい」と言われなかったのには意味があります。イエスは、「信仰を信じなさい」と言うつもりはありませんでした。それは最も愚かな行為です。イエスが明確に言われたのは**「神を信じなさい」**ということでした。信仰は、それのみで成立するものではありません。信仰の向けられる何かが必要とされるのです。イエスの教えによれば、私たちの信仰の対象は、全宇宙を治める偉大なる神です。信仰を抱く対象としてこれ以上の方があり得るでしょうか。信仰を向ける対象である神、信仰が信仰たり得る対象である神は、パウロによれば、**「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる」（エペソ 3 :20）神だ**というのです。そうです。**この方こそ、その大能の力を「キリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせ」（エペソ 1:20）た神なのです。**

> 信じるという際に聖書の約束を信じることのみに限定して信じようとすることはいかに空しいことであろうか。約束というものは約束してくださった方を超えることはできない---ただ、約束は約束してくださった方と同様に素晴らしいのであり、これを知っているからこそ私たちは確信が得られるというのは確かである。神についての知識を豊かなものにすることにより、私たちは同時に自らの信仰を豊かにする。しかし、そうしつつも、私たちは自らの信仰ではなく、信仰の創始者であり完成者であるキリストに目を向ける。魂の目は、自らの内側ではなく外側を、そして神に向けて上を見るのである。魂の健康はかくして確かなものとされるのだ。

マルコの福音書 11 章 22-24 節から学ぶことのできる二つめの教えは、**神を信じることの素晴らしい力と、それがいかに働くかについてのイエスの説明です。**「信仰」（ギリシア御：ピスティス）は、**「信仰－従順」**のように翻訳することも可能です。神のみこころに従順に従い、神に信頼することなくして、神への信仰は存在しないのです。真実で純粋な信仰には、乗り越えられない障害などありません。信仰により、神の無制限かつ比類無き力がもたらされるのであり、私たちの神に不可能なことなど何もないからです（創世記 18:11-14、エレミヤ 32:17、ルカ 1:37、18:27 を参照）。そのような神への、従順な信仰、信頼に満ちた信仰を持つクリスチャンは、みことばを語り、自らの目の前でそのみことばが実現するのを見ることができるのです。イエスがいちじくの木に語りかけられたのも（マタイ 21:19）、まさにこのご性質によってのことでした。ペテロが神殿の門のところにいた足の不自由な人に語りかけたのも（使徒 3:6）、まさにこのことによるのです。しかし、そのような方法で言葉を発す

る前にまず、イエスやペテロにあったような信仰が自分にもあるということ、自らの言葉が人間の単なる思い込みや希望的観測ではないということを確信しなければなりません。

イエスの教えの三つめは、山をも動かす信仰を持つ方法についてのものです。別節は重要な「だから」で始まっていますが、これは、この節をそれ以前の節の内容と結びつけるとともに、そのような信仰が見出せる唯一の方法を示してくれています。それは、**「祈るときには」**ということです。すなわち、神の権威をもって山に語る前に、私たちは**まず神に語るべき**なのです。そして、**神に願いを語る前に、まずはみことばによって**、それらの願いが神のみこころに調和したものであることを見極めなければならないのです。みこころにかなっているという確信が得られたなら、後はただ、お願いしたものをいただくのみ、と信じなければなりません。イエスは、「そのとおりになります」と約束してくださっています。

信仰は、時間に制限されるものではありません。心に信仰が高まってきたなら、その実現が遅れることは、まったく問題ではなくなります。信仰は、祈りの答えのあり方を定めるものではありません。**神のみこころと目的という枠組みの中で、ひたすら答えを確信するものなのです。**